

中 学 校

平 成 5 年 度

教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

音 楽

東 京 都 教 育 委 員 会

平成5年度

教育研究員名簿(音楽)

区市町村名	学 校 名	氏 名
江 東 区	砂 町 中 学 校	◎ 和 田 崇
世 田 谷 区	新 星 中 学 校	吉 田 治 子
北 区	王 子 中 学 校	伊 藤 憲 弘
練 馬 区	練 馬 東 中 学 校	金 澤 美 彰
足 立 区	扇 中 学 校	柴 田 文 恵
葛 飾 区	常 盤 中 学 校	山 中 征 弘
江 戸 川 区	清 新 第 二 中 学 校	○ 吉 岡 幸 子
調 布 市	第 六 中 学 校	伊 藤 晃
秋 川 市	御 堂 中 学 校	鈴 木 福 美 江
瑞 穂 町	瑞 穂 中 学 校	遠 藤 千 夏

◎ 世話人 ○ 副世話人

担当 教育庁指導部高等学校教育指導課指導主事 神原陸男

心から音楽的感動を体験できる指導法の工夫

目 次

I	研究主題設定の理由	2
II	研究の経過	3
III	研究の内容	4
1	音楽的感動	4
(1)	音楽的感動とは	4
(2)	音楽的感動の意義	4
(3)	音楽的感動の場面	5
2	指導事例	6
(1)	中学校入学時の指導の工夫	6
①	入学前	6
②	入学式	7
③	オリエンテーション	7
④	最初の授業	8
(2)	第1学年の指導の工夫	10
①	変声期の指導	10
②	指導の展開例	12
③	適切な教材	13
(3)	第2学年の指導の工夫	14
①	指導の展開例	15
②	適切な教材	17
(4)	第3学年・卒業式の指導の工夫	18
①	指導の展開例	19
②	適切な教材	20
③	合唱コンクール	21
④	卒業式	22
IV	まとめと今後の課題	24

心から音楽的感動を体験できる指導法の工夫

I 主題設定の理由

今日の社会は、情報化、国際化、価値観の多様化等の変化が著しく、知識偏重の教育環境により、知識を咀嚼する時間と体験が持てず、知識を応用していく力が育たないことが問題にされている。こうした中で新学習指導要領では、生涯学習に向けて学校・家庭・地域社会の教育環境を見直し、未来社会の変化に自ら対応し、生徒自身、心豊かに主体的に、創造的に生きることができる資質や能力を身につけることが求められている。このことは、音楽科が目指す「音楽に対する感性の育成」を達成する上で不可欠である。

感性とは、周囲の環境からの刺激に対する感受性やそれに反応する心の働きであり、美しいものや崇高なものに対して感動する心を呼び起こし、真理を求める心や豊かな創造性を生み出すための重要な働きを持つ。しかし、この重要課題の解決に向けての具体的な考え方の検討や、実際の学習指導の工夫については、その研究が不十分であることが現状であろう。

本年度の研究員は、個性を伸ばす指導の充実、感性の育成を図るためには、音楽的感動体験が必要不可欠であると考えた。この音楽的感動体験を通して、一人一人の生徒が心から音楽の美しさを感じたり、考えたりすることによって音楽的感性は養われる。また、感動体験は音楽教育全体のねらいに迫るものとして重要性をもつ。本年度の研究を推進するに当たり、感性と創造性、創造性と個性、また、豊かで多様な個性と音楽の基礎・基本などについても討議され、感性、創造性、基礎・基本のそれぞれが、内面で結合し導かれ個性という個々の思考や態度となって表現されることなど、様々な内的要素についても確認された。

音楽科教育において身に付けた資質や能力は、家庭や地域社会において生かされながら、生涯を通じ、深められ根づくのではなかろうか。音楽は、基礎・基本の習得に長期間を要するが、教師が細かく心を配った環境の中で、教師や友だちとの交流の和やかさが漂い、互いの信頼感と優しさのなかで進められる学習は、音楽を素直に受け入れ、自分の感じ方や考え方をじっくり見つめることができる個性を形成する。このことは、個々の感性を磨くことにつながり、その手がかりとなる心からの感動体験は、次の感動体験を生み、その一つ一つが徐々にではあるが確実に音楽性が培われていくことになるであろう。このように感動体験が新学習指導要領が目指す生涯学習に必要な資質や能力を身に付ける上で大きな意義をもつと考え、本研究主題を設定した。

II 研究の経過

本年度の研究員総会が発足後、5月の例会まで主題設定のための検討を重ねた。その後の経過は以下の通りである。

<5月>

本年度研究主題を推進するにあたり、生徒をより広い音楽の世界に導く上での、各研究員の日常の教育実践上の共通の留意点を次のように見出した。

- (1) 生徒の個性をそのまま肯定すること。
- (2) その広がりと限界を明確に認識すること。
- (3) 成長を評価し、自らに実感させること。
- (4) 先への意欲を持たせること。

<6月>

感性を培う・育てる学習の機会を検討し、合唱活動を通じ総合的学習展開を意図しながら、本年度研究主題を具体的に推進することを協議・確認した。

<7月>

音楽の学習と感性・創造性の関係について検討を重ねる中で、音楽の好き嫌いや関心と感動のレベル等、音に誘発される様々な感情は言語におきかえられて自己の印象を形成するという音楽的思考と言語の関係を確認し、8月の御岳集会に向けて具体的な準備を進めた。

<8月・御岳集会>

ここでは、定例会での協議事項の確認と「感動とは何か」「意義について」「具体的な場面」等十分な協議がなされた。また、合唱活動における各学年ごとの特性や適切な教材について、演奏テープを聴きながらの具体的指導法などの協議・検討を入念に進めた。

<9月以降>

各研究員の事例報告をもとに研究内容の見直しを行い、各事例の充実を図った。また、各事例が一般的となるよう検討を重ね、より実践的な指導事例を目指して研究を推進した。

なお、各領域にわたって扱うことはせず、合唱活動を通じた実践研究を重点としたのは次の理由による。基礎的な学習では、その必要上、歌唱・器楽・鑑賞等の各領域別の学習になりがちであるが、本来、これらの領域は合唱活動を含む魅力的な題材構成による総合的な関連のもとに学習が行われることが望ましい。また、合唱曲における歌詞が生徒にとって音楽的内容理解の手がかりとなることなど、ことばのもつ意義は大きい。本研究は、このような意義をもつ合唱活動が感動体験を通して行われることを目指して行われた。

Ⅲ 研究の内容

本年度研究主題である「心から音楽的感動を体験できる指導法の工夫」を進めていく上で、本年度研究員は、(1)音楽的感動について、(2)音楽的感動の意義について、(3)音楽的感動の場面について、共通理解を図る必要があった。音楽的感動は、あくまで音楽活動を通して得られるものとして理解しなければならないが、研究のねらいを踏まえ、ここでは「音楽の効用」に着目し、音楽的感動の体験と教育的意義との結びつきを通じて、本年度研究主題を具体的に進めていくことにした。

1 音楽的感動

(1) 音楽的感動とは

鳴っている音の形を作ったものにすぎない音楽には、その中にだけある、音楽を通してしか分からないものがある。人は、悲しいときに音楽を聴いて、慰められたり気力を回復したりする。又、同じ音楽を、ある人は「悲しい」と聴き、ある人は「楽しい」と聴いたりもする。これらは音楽の効用にすぎないが事実である。人は音楽を、その効用から切り放して、何も感じないで聴くことはありえず、必ずなにかを感じる。

音楽は人間が作ったもので、作曲家は、それぞれの方法で、形を選び音の形の流れを作る。作曲家個人にどのような思いや意図があろうと、作られた音楽は深い心の働きからできている。その鳴り響く音の形の流れは、感覚を通じ、受け入れる者の心の中に流れこむ。そして、心と心が向き合い音でつながったとき、作品に自己は没入し、しかも心は以前より生き生きと働いている状態を音楽的感動といえよう。

(2) 音楽的感動の意義

心と心が向き合い音でつながったときに生まれる音楽的感動から、我々、音楽科教師が目指す目標は、以下のものが挙げられよう。

- 音楽性の伸長。
- 音楽を愛好する心情。
- 音楽に対する感性の育成。
- 豊かな情操の養成。

感覚と思考に則した音楽的体験は、それがより深い集中及びより丁寧な取り組みであればあるほど人間の生き方の問題となり、精神の躍動をひきおこす。そして、それは、新たな目標に向かう精神的エネルギーとなる。このエネルギーは、自己の未来がどのように広がるかという、対象に対する意義と展望に目覚め、そこに至るまでの目標と過程を明確にし、自己

を支えてくれる人々のために、自己の役割を果たそうとする連帯と責任を生む。このエネルギーこそが、音楽科が目指す目標達成の基盤を成すものとしてとらえておく必要がある。

音楽には、精神の躍動を通じ人間の生きるリズムを回復させる効用があり、音楽的体験から生まれる感動からは、新たな目標に向かう意欲が生まれる。この点に、音楽的感動の意義を見いだすことができると同時に、教育的意義も推察できよう。

(3) 音楽的感動の場面

基本的には、音楽が在るあらゆる場面で可能であろう。しかし、ここでは学校教育活動の範囲内で考えられる、音楽的感動の場面について述べることにする。

・授 業

音楽を作り上げる過程で、音がとれない、リズムがとりにくい、うまく表現できない等、自分で見つけた課題を、自分で解決したときの喜びや自信、教師や仲間の助けを少し受けることで解決したときの信頼感、これら一つ一つの感激が新たな意欲を生み、取り組みの深さと、その積み重ねが感動の瞬間をつくる。

・行 事

- ・儀式的行事……………入学式，卒業式
- ・学芸的行事……………文化祭，合唱祭，区市町村中学校連合音楽会
- ・宿泊を伴う行事………移動教室，夏季施設

・特別活動

音楽の効用を最大限に活用し、仲間との一体感を通じ、連帯の意識を高める学級活動や、音楽体験をより深めようとする部活動、クラブ活動。

・各種音楽コンクール

成果を発表する、各種コンクール。

このように、学校で、音楽的感動を体験できる場面は数多くあり、授業の音楽以外の音楽活動が、学校教育の場で教育的意義と結びつき、意図的に活用されている。もちろん、その活用のされ方は、各学校、地域や生徒の実態によって多様であるが、音楽的感動の効用が、教育活動全般にわたり教育効果があることに異論はないであろう。そして、そのために数多くの場面が意図的に設定されていることは確かである。

以上の共通理解を通じ、本年度研究主題である「心から音楽的感動を体験できる指導法の工夫」の展開例を、入学式準備期間から卒業式までの合唱活動を通じ、その指導法と工夫について具体的に示す。

2. 指導事例

(1) 中学入学時の指導の工夫

新入生は、中学校への期待と不安に胸をふくらませ、かなりの緊張をもって入学式を迎える。このことは、中学校側でも十分考慮されており、これを受けて音楽科でも十分配慮した指導展開を工夫している。

① 入学前

入学前に、準備しなければならないことがいくつかある。まず第一に、小学校との情報交換による生徒理解である。このことは中学校での年間指導計画を作成する上での大切な要素であり、生徒の実態把握を行うことによってよりよい学習指導が可能となる。そこで、小中音楽科での情報交換が必要となる。入学前と後の音楽体験を有効に継続させるに当たり、次の点を把握することが大切である。

- ・地域の音楽的活動の状況。
- ・保護者の音楽的関心の状況。
- ・生徒の日常の音楽的活動の状況
- ・どのような授業をしているか
- ・どのような作品を取り扱ってきたか。
- ・音楽の授業における生徒の実態。
- ・「音楽的感動体験」の場面とその内容

これにより、入学後の音楽の授業の中で生徒の愛唱してきた既習曲を取り上げることによって、小学校時代の「音楽的感動」を再び呼び起こすこともできる。

第二として、環境整備が挙げられる。

- ・音響機器の保守点検
- ・机、椅子の整備点検
- ・掲示物の工夫
- ・破損箇所の修理

ここでは、音楽室の第一印象を良くすることで、音楽への意欲関心を妨げる要素がないように留意したい。

次に在校生は、卒業生が培ってきた合唱を、今度は自分達が新1年生に伝えてゆくのだという意識を高めておくことが大切である。入学式への在校生の参加人数には各学校の実情もあるであろうが、できれば卒業式には2年生、入学式には新2年生というように学年単位で

参加させたい。また、とりあげる作品も各学校の実態によるが、小学校での既習曲をとりあげ全員合唱を展開している事例も報告されている。

最後に、入学式に新生が校歌を歌えるようにしている学校の事例を紹介する。生徒会主催の次年度入学予定者への「学校紹介」、あるいは「体験入学」等を利用し、上級生による校歌の歌唱指導が行われたり、小学校との連携の一環として配布した校歌のテープで練習をお願いしたりすることで、新生が校歌を歌えるようになっている学校の例も報告されている。

② 入学式

音楽科では、入学式を儀式としてとらえるとともに、新生にとって変声期をほとんど終えた上級生の混声合唱によって音楽的インパクトを与えられる、最初の授業としてとらえ、心からの「音楽的感動体験」の一場面としてとらえたい。合唱による「音楽的感動」を初めて体験させる場として、ここでは、混声合唱の響きを体験させ憧れをいだかせることがねらいとなる。

③ オリエンテーション

この時期は、入学式での上級生による声の素晴らしさから得られた感動を、より確かなものとするために、オリエンテーションを積極的に活用し、校歌や簡単な合唱曲を指導したい。

上級生のリーダー集団が朝の学活を利用し、校歌の歌唱指導を実施している学校もある。(新生の各教室から歌声が響きわたる様子は、とても爽やかなものがあり、望ましい人間関係づくりにも役立つであろう。)また、生徒会主催の「新生を迎える会」を利用し、上級生による前年度合唱コンクール優勝クラスの演奏や各学年が得意とする学年合唱を披露し、新生は覚えたての作品を全員合唱することでそれに応えるという事例もある。

このような、入学式前後の指導の在り方によって、3年間の音楽指導が効果的に進められる。入学式や卒業式を「音楽的感動体験」のスタートとゴール(目標)とした場合、スタートへの準備段階の工夫がより必要となる。指導事例は、ごく限られたものではあるが報告にみられるような工夫と導入により、実際に音楽に対する意欲関心を高めている。このように、機会を逸することない意図的な取り組みが、生徒集団の学校生活を生き生きと送る環境を作り出すことにもつながる。ただ、この取り組みが音楽科だけで展開されているわけではないことも事実である。音楽科教師の日頃の授業の充実はもちろんだが、全教員の意志の疎通の裏付けがあってはじめて可能となり、目標を達成する上での重要な要素でもある。

④ 最初の授業

いかにして生徒に音楽的感動を体験させるかということを考えてみると、平素の授業の充実がいかに大切であるかが分かる。特に最初の授業は、3年間の音楽活動の導入として考えられ、学習意識を高めると同時に雰囲気づくりの時期としてとらえることができる。次に、最初の授業に向けての展開上必要と思われるものを挙げる。

ア、約束ごとについて

授業を進める上で、様々な約束ごとが設定されているはずである。生徒はそれらを十分理解し守りつつ学習効果をあげていくことになる。以下、例を挙げる。

- (ア) 音楽室への移動 (イ) 音楽室へ入るときの心構え
- (ウ) 授業開始までの過ごし方 (エ) 授業開始の仕方
- (オ) 持ち物、服装 (カ) 音楽活動中のきまり etc

イ、生徒との人間関係づくり

生徒との出会いのインパクトは、以後の望ましい人間関係をつくる上で大切である。教師自身の観察力と洞察力は、温情ある丁寧な指導の印象付けを左右する。インパクトの与え方には教師個々の違いはあるが、互いの信頼度を増す糸口としても重要である。

ウ、指導観の明示

最初の授業で教師の指導観をわかり易く生徒に伝え、学習の目安を示すことで、生徒は学習目標を設定し易くなり、努力点を具体的に考えることが可能になる。ここでは、音楽的感動を得て卒業させる視点で考えるわけだが、そのためには、教材やその配列、与え方、掘り下げ方を十分に吟味し、生徒の実態にあわせて実践していくことが重要である。

「音の持つ表情」を本研究主題に合わせ、3年間の授業構築を計画した例。

- 1年生 感覚的に音の持つ表情を感じ取らせながら授業構築をする。
- 2年生 音の持つ表情を意識させ考えさせる。
- 3年生 総合的に音の持つ表情を感得・対応させ、自己の表現に生かす。

エ、最初の曲の選択

入学後の生徒には中学生としての期待と不安、より深く学ぼうとする意欲の旺盛さなどがある。この時期の教材として、効果的・計画的に授業展開を可能にする曲の選択は大切である。また、中学生としての誇りと所属意識を深めるために、校歌を選曲し、生徒の気運の高いうちに指導することで、授業スタイルや方針を自然に示すこともできる。

なお、変声中の生徒に留意し十分な指導計画のもとで進めることが大切である。

オ 最初の授業の導入例

チャイム前に音楽室で着席して待たせる。チャイムが鳴り止むと同時にドアをガッと開け、号令後、無表情のまま出席をとる。また名前は事前に読めるようにしておくことも大切である。自分の名前を丁寧に板書し、自己紹介を始める。ここから表情を一転して柔和にする。次に授業の進め方の基本姿勢や理念を巧みな話術とピアノや声でユーモアをもって、そしてだれないように集中発散法を用いて伝える。ピアノで7度系、付加4度系、付加2度系、付加6度系、ぶどう状和音や、全音音階、日本音階などを含む知名度の高い曲を断片的に話に織りこむ。黒板を搔く音や机を叩く音なども交えて「音の出す表情」について気づかせる。そして、教材につなげていく。

チャイムと同時に、きちんと並んで音楽室に来る。緊張している。教師は音楽室で待っている。男女別・出席順に着席させる。「こんにちは、私がA中学校の音楽の先生〇〇〇〇です。(名前を板書する。)音楽の授業好きだった人、手をあげて。(あまりあがらない。)そうか、音楽という字をじっと見てごらん。(音楽と板書する。)どういう意味だろう。音を楽しむと書くんだよね。これからの3年間で本当の音を楽しむために先生も頑張るから、みんなも元気よく頑張ろうね。でも本当の音を楽しむためには美しく表現しなくてはいけないんだよ。この美しさを求めて努力していこうね。」

ここで昨年の合唱コンクールのビデオを見せる。見せ終わった後、発声練習をする。姿勢や頭声発声、表情など次々と指導していく。終止形3和音の練習を徹底的に行う。

校内に不慣れな時期なので教室で行う。最も重点を置くのは、より良い人間関係作りの第一歩とすることである。したがって、教師自身の教育観・授業観・音楽観を明るく生きいきとした調子で語る。3年間を見通した目標と流れ、そのために必要な約束事、評価の観点。それらを語った後、一緒に音楽室に移動する。音楽室に入ったら、まず、大きな声で歌わせることに全力を注ぐ。最初の教材は校歌である。一通り歌って聞かせ、聴唱で教えた後、音楽的に最も魅力のある部分について、丁寧に指導する。

(2) 第1学年の指導の工夫

<生活全般の特性>

- ・入学したばかりということもあり、緊張した面持ちで日々の生活に臨んでいる。
- ・全体的に、教師の発問などにも素直に応じ、真面目に授業を受けている。

<音楽的側面から見た特性>

- ・明るく、乗りの良い曲を好み、大きな声を出すことに抵抗が無い。
- ・男子生徒の半数以上は変声前であることが多く、斉唱させやすい反面、混声合唱では音域に無理が生じる場合もあるので、教材を選択するに当たっては十分な配慮が必要である。

その他の細かい点は前項で述べているので、次に変声期の指導について述べる。

① 変声期の指導

ア 変声というと、とかく男子のことにのみを考えてしまいがちだが、女子にも変声がある。ただ、男子に比べ目立った変化がないため、あまり重要視されていないが、女子にも変声があるということだけは知っておいた方がよい。中学入学時の男子生徒の変声の割合は、先に述べたようにまだ半数にも満たないことが多い。しかし、2学期を境にして、急に変声者の割合が増えてくる。変声期の兆候として現れてくるものには、次のようなものが挙げられる。

- ・声に艶が無くなる。
- ・声が嘎れてくる。
- ・特に高音域の声が出しにくくなる。
- ・音域が狭くなり、今までのように歌えなくなる。
- ・声のコントロールができず、思った音と違う音が出てくる。
- ・声がひっくり返る。
- ・低い大人の声の中に、不意に高い子供の声が出ることもある。

以上は代表的な兆候だが、こうした兆候を全く感じないまま変声を終えてしまう者もいれば、中には殆ど声が出なくなってしまう場合など様々で個人差が激しい。教師は常に生徒の声が現在どのような状況にあるのかを把握しておく必要がある。また、声の状況からも分かるように、声帯周辺部の状態も腫れや浮腫みなどがあり、無理をさせることは好ましくない。この時期では、合唱を無理なく、楽しく行えるよう、教師は、こうした様々な変声に対する問題を十分に考慮した上で指導に当たる必要がある。

イ 指導の具体例

先に述べたように、変声期は音域が極端に狭くなる。下の譜例はその移り変わりを示したものである。



こうした音域の変化を十分に考慮した教材を選択する必要がある。1年生の始め頃は、小学校時代の延長で同声二部合唱を歌わせることが多いが、変声の状況によってはなるべく早く、混声二部・三部合唱を導入した方がよいと思われる。

＜同声二部合唱を指導する場合＞

変声中の男子がいる場合、低い声部を男子に歌わせ、女子が高い声部を歌う。この場合男子が無理して1オクターブ下げて歌わないようにする。また、変声前の男子とソプラノが高い声部を歌い、変声中の男子とアルトが低い声部を歌うのも良い。

＜混声二部・三部合唱を指導する場合＞

変声後の男子は、当然のことながら、へ音譜表の男声部を歌わせる。変声前の男子はソプラノの声部、変声中の男子はアルトの声部を無理なく歌わせることも良い。

以上は合唱形態の曲の場合を述べたが、斉唱の曲を扱う時は、移調させて歌わせることも大切であろう。1年生初期の教材はハ～ハ[♯]位のもが多く、変声期の男子には歌えないので、このような時は、5度下に移調すると変声期の男子にも大変楽に声を出すことが出来る。変声が完全に済んでしまえば、1オクターブ下げて歌うことも出来るので、それまでの間はこのような方法を採用することが望ましい。

ウ まとめ

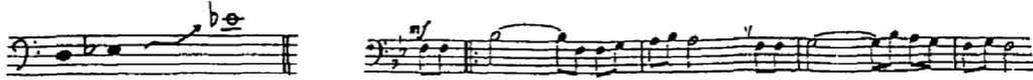
変声は大人へと成長していく中で、誰もが必ず経験していくものである。したがって、正しい知識を持たせ、変声期が来た時の適切な注意を心掛けさせることが必要である。特に注意させたい点としては『無理をさせない』ということである。また、『神経質にさせない』『必要以上に意識させず、音楽する楽しさを味わわせる』なども挙げることができよう。授業の中で、教師は変声中であるという意識を生徒に持たせているが、一步音楽室を離れると、そのことをすっかり忘れてしまい、かなり無理をしている場合も少なくない。運動部などで無理して声を出すことにより、声が出にくくなる例も多い。このことについては、他教科の教師の理解を得ることも大切であろう。

② 指導の展開例

ア. 教材 「夏の日の贈り物」 混声二部合唱 (高木あきこ 作詞/加賀清孝 作曲)

イ. 教材観

- この曲は、変声期の男子にとって音域に無理がなくのびのびと歌うことができる。



ひくいD音やE♭音は変声期の男子にとっては出しにくい音域であるが、音量の少なさを女子との斉唱により補っている。

- 斉唱と二部合唱の両方の響きを味わうこともできる。
- 和声部にも工夫がなされており、旋律と抑揚が一体化していて歌唱の表現力を高めることさえもできる。



この曲の最も盛り上がる部分の男声パートであるが、主音から経過的に用いられている借用和音を経て4度上がる上行進行は、歌う側の音楽的欲求を満足させるものである。

- 伴奏にも十分な工夫がなされており、同じ旋律の繰り返しでも和音を変えることにより曲全体の締まりが増し、音色的変化を表現することができる。

やまは - あまのいづよ けたに
あるく - きょうのみちよ とじた

- 対位的な部分が多く、他声部につられずに合唱することができる。このことは、自信を持って合唱するためのとても大切な要素の一つである。

は - たかく そびえ たい ことが ぼくらを よんだ やま
やまは そびえ たい ことが よんだ

以上さまざまな点から見て、この教材が混声合唱のための導入曲として適しているといえるであろう。

ウ. 生徒の実態

音楽に対する興味・関心をもっている。女子は全体的に音楽を好み、合唱練習にも積極的に取り組む姿勢が見られるのに対し、男子の多くはまだ変声を終えていないので、声を出すことに少し戸惑いを感じているようである。

根気や落ち着きがなく授業に集中出来ない生徒もいるが、互いに教えあったり、真面目に取り組もうとしている生徒も少なくなく、抒情性のある曲を好む傾向が強い。

エ. 指導の工夫

- ・歌詞をノートに写し朗読させることにより、詩の内容を理解し、全体のイメージを持たせるようにする。
- ・フレーズを大切にし男女の掛け合いの部分や、和声的な部分のバランスを大切にし豊かな響きが得られるようにする。
- ・お互いの歌声を良く聞き合い、響きの美しさを感じ取れるようにする。

オ. 感動体験での場面

生徒の合唱を録音し、それを聴かせ感想を求めたところ、さまざまな発言がでてくる。その発言をもとに出来ていない部分を取り出して、繰り返し練習することでより正確に合唱できるようにし、歌詞の内容を活かし、フレーズを大切に表情豊かな合唱ができたか、他声部をお互い聞き合いながらのびのびと歌うことができたか、等を生徒一人ひとりに確認させ意識を持たせる。この活動を通し、生徒自身の教材に対する興味・関心を高めさせさらに、愛着を持たせることにより「歌っていると涙が出てきそうな気持ちになった。」などの感想が聞かれるようになる。

③ 適切な教材

男女とも無理をしないで声を出すことができ、又、歌うことに対して自信をなくさないようにし、歌うことが好きになるようにさせたい。更に、男女の人数のバランスなども考慮し、合唱できる教材を精選する必要がある。一年生にふさわしいと思える合唱曲を次に示す。

・混声二部合唱

さばくのきょうりゅう グリーンブルー セビリアの春祭り フレイトイ ぼくらの世界
飛ベグライダー 風に吹かれて 季節の色

・混声三部合唱

夢の世界を 夢は大空を駆ける はばたけ鳥 怪獣のパラード カリブ夢の旅 夜汽車
マイバラード フェニックス Let's search for Tomorrow

(3) 第2学年の指導の工夫

<生活全般の特性>

- 学校にも慣れ、さし当たっての目標がないため、だらけやすい。一般的に「中だるみ」の学年と言われるが、後半からは生徒会や部活動の中心となり徐々に自信を持ち始める。
- 身体的発達著しいが、精神的に不安定な状態になることもある。ちょっとした言葉の行き違い等から人間関係に影響が及ぶこともある。
- 学習面での差が出始め、授業態度にも影響が及ぶこともある。
- 知識が豊富になってくる時期でもあり、自分なりの考えを主張するようになる。
- 異性への関心が高まってくる。

<音楽的側面から見た特性>

- 男子は変声が進み、低い声が出せるようになってくる反面、声を出すことにはずかしさを感じるようにもなってくる。
- 音楽に対する興味・関心の違いがはっきりしてくると同時に選曲に対して、自分の意見を強く主張するようになる。
- 音楽室への移動が遅くなりがちで、忘れ物が目立ってくる。

<指導上の留意点>

- だらしない面をそのままにして授業を進めるのではなく、きちんと出来るまで生徒を信じ指導する。
- 自信を持てるような言葉がけをしていき、生徒に「やる気」を起こさせることが大切であろう。
- 毎時間の指導目標を明確にし、常に評価を与えながら根気強く指導していく。
- 混声三部合唱を数多く取り上げ、和音の美しさ、深さに興味を持たせる。
- 歌う者、聴く者に感動を呼び起こすために、歌詞の内容や曲の構成がしっかりした曲を選曲することが大切である。
- 短時間で仕上がる曲ばかりでなく、何時間もかけなければ仕上がらないような曲を経験させることにより、仕上がるまでの過程が大切であるということを気付かせることも必要なことである。
- 歌声に落ち着きが増してくる時期であるから、「響きのある声」とはどういうものかを考えさせ、さらによりよい発声へと指導していく。

① 指導の展開例

ア、教材 「山のいぶき」 混声三部合唱 (松前幸子 作詞/川崎祥悦 作曲)

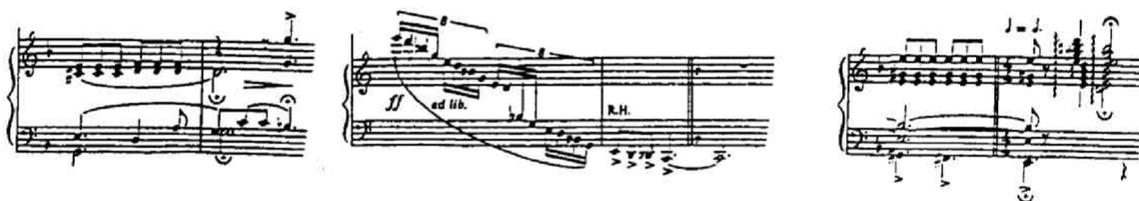
イ、教材観

- 大きく4つに分けることができる。



やや長めの曲ではあるが、各部分づつ独立して練習できるので取り組みやすい。

- 歌詞の内容はわかりやすいものであり、すがすがしさを感じる。
- 転調が効果的に行われている。

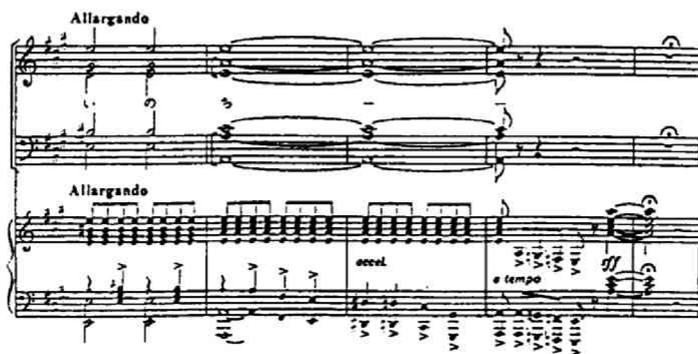


転調により、曲に躍動感を与えることができ、自然に先に進んで歌ってみたいと意欲を起すことができる曲である。

- 前奏をはじめとするピアノの伴奏はとても魅力的で人の心をひき付けるものがある。



- 堂々としたコーダの部分は混声四部となり、より一層深い響きに親しむことができる。



ウ 生徒の実態

- ・1年次に合唱コンクールを経験しているので声を出すことに対する抵抗は少ない。又上級生の歌声も聴いているので「追いつけ追い越せ」という意識が強い。
- ・この曲を初めて聴かせたところ、「難しそう、長い」という意見が大多数を占めていたが、自分たちも歌ってみたいと感じた者も、少なくない。
- ・男子のほとんどは変声期を終え、安定しつつもまだ一つの響きとしてのまとまりに欠ける。また、中には1オクターブ下げて歌う生徒もいる。

エ 展開（7時間扱いの第4時 前半部分の合唱）

◆：評価の観点

指導内容	学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・前時までの復習 	<ul style="list-style-type: none"> ・パートごと順番にピアノの周りに集めて、各旋律の確認をする。 ・録音したテープを使い、他のパートが練習している間も自分たちで協力して、音程をさらに確実なものとしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音取りの段階では、なるべくピアノの側に来させる。 ◆積極的に声を出そうとしているか。
<ul style="list-style-type: none"> ・合奏練習 	<ul style="list-style-type: none"> ・無伴奏でソプラノ・アルトの二部合唱 	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノの音ばかりに頼ることなくア・カペラでも練習させる。
<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p><教師の一言> 「スケートで滑り出すように初めの音はスッと歌おうね。」 「“やっま〜”にならないように気をつけよう」</p> </div>		
	<ul style="list-style-type: none"> ・伴奏を付けて女声パートのみの合唱 	<ul style="list-style-type: none"> ◆音程がしっかりとれているか
<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p><教師の一言> 「眉を上げる気持ちで声を出してみよう。どこに響く感じがするか意識してごらん」</p> </div>		
		<ul style="list-style-type: none"> ◆指示に従って努力しているか。

<ul style="list-style-type: none"> ◦ 男子パートの練習 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 歌い出しの場所が理解できているか。
<p><教師の一言> 「ハミングのところは階名で歌って音程を確実に覚えよう。」</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 混声三部合唱の練習 • ピアノは各パートの旋律を弾く。 • 伴奏にのっての合唱練習 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 言葉をていねいに歌わせる。 ◆ 和音の響きがとらえられているか。 ◆ 伴奏の流れにのってしっかりと歌うことができたか。
<p><教師の一言> 「前半部分の山場はどこにあるかを考えながら歌ってみよう。お互いのパートを聴きながら合唱してみよう。」</p>	

オ 感動に至るまでの指導の工夫

- 正しい音程やリズムをとらえさせることが感動への第一歩であることはいうまでもなく、地道な指導の積み重ねにより、美しいハーモニーの世界へと入っていく。ここではパート練習の方法が重要となる。練習中の歌声を録音したテープを活用し、自分たちで練習させる。自分たちの歌声なので、わかりやすく興味を持ち方も違う、この段階で強弱などの工夫をさせ、さらに、曲に対する理解をも高めさせることが大切である。
- 長い曲の場合は、全体を通して練習するのではなく、区切りの良いところまでを合唱しハーモニーを楽しませる。部分的にでも美しい響きが出れば感動を覚えるものである。この小さな感動を大切に育て、さらに大きな感動へとつなげていくことが必要である。
- 教材研究を十分行い、自信を持って授業に臨むことが大切である。そして、教師自身が沢山の感動体験をすることにより、生徒にも反映していくものである。

③ 適切な教材

混声三部合唱を中心とし、ハーモニーの美しさ、深さを感じられる曲を次に示す。

時の旅人 モーニング 遠い日のうた 虹色のかね 心の瞳 光の海 アムール河の波
野性の馬 一日に何度も 南風 心の中に 少年の日は今 ともし火を高くかかげて

(4) 第3学年・卒業式の指導工夫

第3学年は週に1時間しか音楽の授業がないうえに、3学期は進路選択や卒業式練習などが入ってくるため、年間を通して十分な授業時間が確保できないのが現実である。また、自己の進路を目指して、いままで経験したことのない大きな壁を乗り越えなくてはならないため、進路に対する不安や悩みをもつ生徒もいる。

卒業式は、今まで継続的に学習してきたことの集大成を発表できる、大変意義のある行事であり、中学校3年間で学んできたことの成果を現すことができる場である。そこで、音楽科としてどのような歌をどのように歌わせるかを十分検討する必要がある。

以下に、生活全般と音楽的側面からみた特性を述べる。

<生活全般の特性>

- ・最高学年であるという意識から積極的にリーダーシップを発揮できる。
- ・様々な学校行事において、中学校生活最後であるという意識が増し、今まで以上に真剣に取り組めるようになる。

<音楽的側面から見た特性>

- ・変声期を終え、響きのある豊かな歌声が得られることにより、混声四部合唱など高度な合唱曲に取り組めるようになる。
- ・歌詞の内容などを十分に考えさせることにより「生き方」を学ばせることができる。
- ・音楽に対する興味・関心はかなり高まる時期であると同時に、音楽の嗜好もはっきりしてくる。
- ・合唱コンクールや生徒集会等で他学年に歌声を聞かせる機会がある場合、当然最上級生であるという意識があるため、他の学年に比して、ひびきの充実した素晴らしい歌声を聞かせることができる。このことは下級生への範唱になるだけでなく、自分達のレベル・アップを更に意欲できる大切な場である。

<指導上の留意点>

- ・扱う教材、特に歌詞の内容について十分配慮する必要がでてくる。このことにより、より深い感動を体験することができる。
- ・日頃から、最高学年であるという意識が高まるような指導をする必要がある。
- ・大きな声で気持ち良く歌わせることにより、心の充実感を体験させることも大切なことである。

① 指導の展開例

ア 教材 「大地讃頌」 混声四部合唱（大木惇夫 作詞／佐藤 眞 作曲）

イ 教材観

3年生では、今までの合唱への取り組みのまとめとして、豊かな響きの得られるスケールの大きな曲にじっくりと取り組ませたい。1, 2年生のときに聴いて感動体験している「大地讃頌」は、生徒自身の心の中に感動を通して得た表象すべき音の持つイメージを確立させている曲である。そして、それを自らの力で追体験を求めてアプローチして行ける素晴らしい教材である。

- 和声的には複雑な部分もあるが、各声部の流れは途切れることなく自然に歌うことが出来る。



- 各声部が独立して歌う部分があり、十分な満足感を得ることが出来る。



- 8小節の間奏は、作品に対する自分の考えを見つめる時間として重要な部分であり、次の歌い出しに向けての良い意味での緊張を生み出す。



- 緊張感のある和音からの開放は、歌う側の心を揺さぶる。



- 内的エネルギーを放出し終えることにより、満足感と成就感を得ることが出来る。



1. 生徒の実態

1, 2年次のときの取り組みを通し、パートリーダーを中心に生徒自身による積極的な授業展開が可能である。生徒の精神的成長にともない歌詞の受けとめ方にも深さを増し、合唱を総合的にとらえる様子も伺えるが、多感な年頃から持続力を欠く場合もあるので、生徒の心情にふれる指導を心がけたい。

エ 指導の工夫

・楽譜に書き込みを指導する

楽譜の把握と部分練習のために練習番号をふらせ、また、教師やパートリーダーからの指示をその都度書き込ませ、楽譜に形を残し積み上げていく。

・到達目標の設定

比較的どのパートも旋律的に歌いやすいが、曲の構成やダイナミクス、後半の部分の音程や音域など、毎回ポイントを細かく指示していく。楽譜に記されていることは主にパートリーダーが指摘できるように働きかけ、成就感が持てるよう助言していく。また、その都度意欲につながる評価を与え次回への手がかりとする。

・感動の広がりを求める

パート練習の段階を経て自らの音に自信を得たら、混声四部の合唱練習へと進む。小さな感動は次の感動を求め、さらに次の感動へとつながっていく。

オ 感動体験の場面

静かな前奏に始まり、徐々に気持ちの高ぶりを思わせるこの曲を、全員で声を合わせて歌うことに大きな喜びがある。また、この曲が持つ音楽的な緊張と弛緩は、生徒の心情を大きく揺さぶり感動へと向かう。

② 適切な教材

混声四部の響きを通じ、より深い感動を得られる曲を次に示す。

大地讃頌 河川 青葉の歌 ひとつの朝 一羽の鳥 海の若者 ハレルヤ グローリア

友よ北の空へ 名づけられた葉(2曲) 若葉よ来年は海へ行こう

旅立ちの今たしかめあって たびだち 旅立ちの日に さようなら さよなら友よ

巣立ちの歌 そのままの君で はばたこう明日へ

<ア・カペラ> 森の狩人アレン 家路 星影さやかに 星の世界 いざたて戦人よ

遥かな友に リパブリック賛歌 喜びの歌

③ 合唱コンクール

ア 3年生による主体的な企画・運営に対する指導

合唱コンクールは、できるだけ、生徒の主体性を尊重して企画・運営していくことが望ましい。そのためには、生徒による運営委員会を早朝から（例えば3か月前）組織し、音楽科が適切に生徒の組織をサポートすることが必要である。

その際、特に3年生は、これまでの校内の合唱コンクールの体験を通して主体的な企画・運営を行うことができる学年であることから、生徒が自分達で作り上げていく喜びを味わうことができるよう、励ましながら指導することが大切である。

イ 心情を込めて歌える合唱曲の選択に対する指導

課題曲・自由曲の選択に当たっては、基本的には、生徒の自主性を尊重することが大切である。

その際、音楽科教師は、生徒が心情を込めて歌える合唱曲を選択できるよう、魅力ある合唱曲の一覧を用意するなどの配慮が必要である。この合唱曲の一覧を示すことは、教師の音楽観の表明であるとともに、合唱コンクールに対する願いの表明でもある。

生徒は、これを基にして、教師の助言を得ながら意欲的にクラスの実態に合った選択を行うことが可能となる。

ウ 練習の過程で生じる諸課題の解決に対する指導

合唱コンクールに向けて、生徒が主体的に練習を行うためには、教師の助言・援助が必要である。特に、リーダーが少なくなっている状況においては、リーダーに対してだけでなく、クラスの全員に対して、きめ細かな助言・援助が必要である。

また、教師は、練習の過程で生じる諸課題を早期に気付き、解決にあたることが大切である。

エ 効果的なパート練習に対する指導

パート練習は、合唱コンクール向けの有効な練習形態であるが、それを効果的に行わせるためには、クラスの雰囲気作りに十分留意するとともに、パート練習の具体的な方法をパートリーダーに対して予め指導しておくことも重要である。

オ 感動体験に向けての指導

合唱コンクール当日の演奏は、生徒にとって、多くの苦労や努力の成果を心を合わせて歌う、大切な発表の場である。また、その時の感動は、努力が多いほど、一層深いものとなる。教師は、このことを念頭に置き、毎日の指導の中で励ますことが大切である。

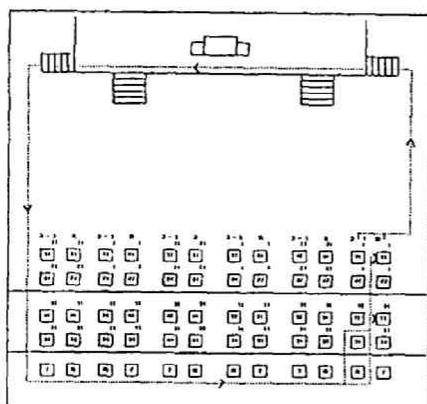
④ 卒業式

入学式でも述べたように、音楽科では卒業式を最後の授業ととらえ、音楽的感動の場面として指導の工夫をこらしたい。そこで、式歌とともに生徒の意識が高まるような式にふさわしい内容の合唱曲をとりあげたい。また、合唱時の各パートの座席配置も考慮したい。

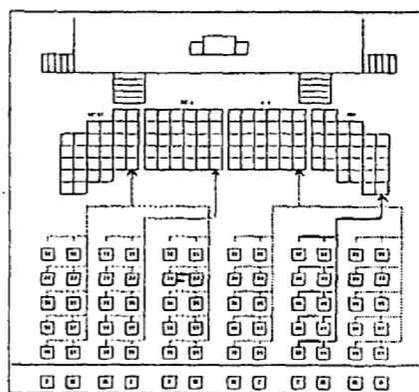
以下は、座席配置を工夫している事例である。

卒業証書を授与される前は出席番号順に座り、授与後席に戻るときにはパート別に座るよう事前に練習しておく。(下図A参照) また、さらに音楽的効果をあげる上で、舞台前に速やかに整然と整列させる例も報告されている。(下図B参照) さらに、舞台前に合唱用の張り出し舞台を特設する学校もあることを報告しておく。なお、パートの人数が均等でない場合や移動しにくい場合は、あらかじめ余分な椅子を1列並べておくと移動しやすい。

(図A)



(図B)



次に、卒業生が主役でありその意識を高めるために、指揮者・伴奏者ともに卒業生が行っている例が多い。式での合唱表現は音楽的正確さだけではなく、3年間を通じた合唱活動の集大成としての表現場面である。生徒一人ひとりが持つ音楽的能力を十分発揮することは、最も質の高い集団意識を生み、音楽的感動の頂点となるものである。涙をこらえての熱唱は、式に参加した全ての人々に同様の感動体験を与えるに違いない。

音楽的感動体験を日頃の音楽科の取り組みを通じ展開してきたが、研究内容の前文でも述べているように、音楽的感動の場面は学校という場で数多く用意されている。心と心が向き合い音でつながったときに生まれる小さな音楽的感動でも、教職員の連携や信頼に支えられながら大きく成長するであろう。我々音楽科は、様々な機会を利用し各自工夫しながら積極的に取り組んだ結果として生まれてくる音楽的感動の場面を、関わる人々と共に育て上げていく努力の継続を忘れてはならない。

都内の中学校の卒業式でどのような教材が扱われているか等をアンケート調査を行った。

その結果、次のような集計結果を得たのでその概略を次に報告する。なお、詳細は別紙にて配布する。

<アンケート質問項目>

1. これまで卒業式で歌っている曲には○印を、歌っていない曲には×印を丸で囲んで下さい。
- A. 揚げば尊し (○・×)
 B. ほたるの光 (○・×)
 C. 巣立ちの歌 (○・×)
2. 卒業式で歌っているその他の合唱曲がありましたら、合唱曲名をお書き下さい。
3. 今後、先生が卒業式に歌わせたいとお考えの合唱曲がありましたら、合唱曲名をお書き下さい。
4. その他(卒業生を送る会等で歌っている合唱曲名など教えていただければ幸いです。)

<アンケート集計結果概略>

アンケート解答総数		187校
1. A.	○印	82校 44%
	×印	105校 56%
B.	○印	110校 59%
	×印	77校 41%
C.	○印	93校 50%
	×印	94校 50%
2.	上位 9曲	
	大地讃頌	106校 57%
	旅立ちの今たしかめあって	14校 8%
	さようなら	11校 6%
	そのままの君で	10校 5%
	旅立ち	9校 5%
	さよなら友よ	8校 4%
	思い出は空に	8校 4%
	時の旅人	7校 4%
	河口	7校 4%
3.	上位 8曲	
	大地讃頌	32校 17%
	旅立ちの今たしかめあって	12校 6%
	ハレルヤ	11校 6%
	河口	10校 5%
	旅立ちの日に	10校 5%
	ひとつの朝	5校 3%
	一日に何度も	5校 3%
	巣立ちの歌	5校 3%
4.	上位 8曲	
	大地讃頌	19校 10%
	そのままの君で	12校 6%
	マイバラード	9校 5%
	さようなら	8校 4%
	乾杯	8校 4%
	若い翼は	7校 4%
	旅立ちの今たしかめあって	6校 3%
	思い出がいっぱい	6校 3%

IV まとめと今後の課題

本年度教育研究員は、生徒一人一人の個性を生かし、豊かな感性を育成するためには、日頃の授業における音楽的感動体験が不可欠であると考え、「心から音楽的感動を体験できる指導法の工夫」を主題に設定し、研究を進めてきた。

また、音楽の各領域の中で、本来、音楽的感動を体験できる場でありながら、その実現のために相当の指導上の工夫が要求される「合唱」指導に重点を置いて研究を進めた。

その際、音楽的感動について共通理解をするとともに、生徒の入学から卒業にいたるまでの音楽科の指導の工夫を系統的に研究することとした。

その結果、「音楽的感動とは、深い心のはたらきから成る音楽が、聴く者の心の中に流れ込み、音を媒体として相互の心がつながった時の、心が生き生きと働いている状態のことである。」ことが理解された、

このような意義をもつ音楽的感動の場面には、生徒が初めて中学校の音楽を体験する入学式、1年生としての初めての音楽授業など、数多くあるはずであり、とりわけ、卒業式の全員合唱は、生徒にとって、中学校の音楽授業の成果を発表する最後の場でもある。

入学式及び初めての音楽授業における音楽的感動を起点として、変声期の時期、第2学年、第3学年という経過の中での、音楽的感動の体験は、音楽科の共通の願いである。

中学校3年間においては、合唱指導の工夫が一層必要となる時期がある。

それらの時期における工夫の一つが、生徒にとって魅力ある教材の選択である。楽曲がもつ音楽的にすぐれた教材性が重要な位置を占めている。

その他の工夫として、生徒の心身の発達段階の理解、学級集団の雰囲気づくり、生徒と教師との人間関係づくりなどがある。

これらのことについては、具体的に指導計画を立て、実践研究を重ね、各時期における基本的実践例を示すことができた。

今後の課題としては、第一に、音楽的感動を体験できる合唱指導の工夫を更に効果的なものにまで深めるとともに、合唱指導だけでなく、他の音楽活動を含めた総合的視野に立った指導の体系化を図ることがあげられる。

第二に、新学力観及び新評価観として示された評価の在り方に十分配慮し、生徒一人一人の意欲を重視した評価を重視して、形成的評価の機能を生かしながら、学習指導の中に計画的に位置付け、生徒の全体像を総合的に評価していくことが今後の大きな課題である。